

「作文」指導における人間関係

— 高校の国語教室づくりのために —

堀 泰 樹

はじめに

昭和五五年一月二十五日からおよそ一ヶ月の間、時間数にして八時間をかけて、高等学校一年生を対象に「現代国語」の時間に「作文」の授業を展開した。学年末の時期でもあり、あわただしい中にあって、集中的に作文の時間を設けたのは、わたくしにとっても生徒たちにとっても、ともにはじめての経験であり、それだけ授業に臨む前の不安は大きいものであった。

ここに報告しようとするのは、「作文」の授業全体についてはなく、そのうちの一部にすぎないのであるが、そこに問題意識をわたくしなりに見だし、考えさせられていたことについて、以下書き綴っていきたい。

「作文」の時間を集中的に短期間に設けた理由は、それまでに「作文」の時間を二、三時間しかとっていなかったこと、また書かせっぱなしであったこと、さらには短期間に時間を集中することにより、生徒たちの「作文」というものに対する意識を変えさせたいというのが、主たるものであった。

実際、「作文」ということばを聞くだけでもいやがる生徒は少なくないのである。

そのような思いで、「作文」と題した単元を次のように組んだ。

単元「作文」。対象クラス 1年3組

〔単元のねらい〕

(1) 「作文」ということへの抵抗感をなくす。

(2) 自分のことばで書き綴らせる。

(3) 文章構成のしかたを身につける。

〔単元の展開〕

△第一次√(第1時) 1月25日

1 「文章について」(阿川弘之)を読んで、描写について考える。

2 教室の窓から見える風景を描写する。

△第二次√(第2・3・4時) 1月30日、2月1・6日

1 「風景の描写文」の例を読む。

2 「他者紹介文」「自己紹介文」を、描写という観点で書いていく。

3 二種の「紹介文」の例を読んで、描写について考える。

△第三次V(第5・6・7・8時) 2月8・13・16・27日

1 文章構成の型のいくつかを知る。

2 文章構成の型を生かして、評論文を書く。

3 「作文」の学習をまとめる。

※注 「文章について」(阿川弘之)の文章は、教科書・

「新編現代国語1」(学校図書)のものを利用。

はじめの予定では、生徒作品のいくつかをガリ版印刷し、読ませるつもりであったが、印刷機の故障のため、教師がそれらを読み、生徒が聞くというふうになった。

ここでは、第二次の展開に焦点をしばって、そこに見いだされたこと・気づきについて述べていく。

第二次の指導は、単元のねらいの1と2を達成しようとしたものである。その際、描写」ということに心がけさせて記述させようとした。

ここでの指導は、「文章(作品)の記述↓文章(作品)の鑑賞・批評」という流れのくりかえしによって、表現のおもしろさを感じ文章表現学習の入門へと導くことに眼目があったわけである。

「他者紹介文」の例二篇を次に記しておく。

1 「西村さんの話についていけないのは、西村さんのあの純真さがいけないのだ。

数学の問題がわからないからと、私の所へやって来る。一応解いて説明したところ、一度でわかってくれたことは、まずない。私なら、教科書に書かれてあることは、あたりまえのこととしてそのま

まうのみにしてしまふところだけれど、彼女の場合、そういうことさえ、特有のことばで何度も聞き返し、徹底的にわかろうとする。しまいには、こちらの頭が混乱し、彼女のことは理解に苦しむようになる。そういう彼女の話に対する先人観が、日常の会話に影響しているのだ。

そういう弊害もあるけれど、私がそんな素直な心をしている彼女がうらやましい。そして、そのため、話が時にけんか腰になることもあるが、かえってお互いを追求しあい、理解を深めることができ、友情も深まるのではないかと思う。彼女と接した誰もが、そういう気持ちになるに違いない。」(T・O女)

2 「彼女は、とにかくまじめな人です。毎日呉の天応から通っていて、通学時間もずいぶんかかるだろうし、女子軟庭班のキャプテンをしていて、精神的にも肉体的にも大変だろうと思うのですが、彼女が宿題をせずに登校するということはまずありません。どのノートもきちんとまとめてあるし、何か質問に行くと、それは丁寧に教えてくれます。

だから最初は「なんか近づきたいな」と思っていたのですが、この頃、本当はともかわいいたころもあって愛すべき人なのだとわかってきました。この間なんかは「パーッと騒ぎたい。」と言い出して、友達を引きつれて、なんと泳ぎに行ったり、私なんかから見たらそれとちゃんと勉強している証拠なのに「勉強の仕方が一時しのぎだ。」なんて悩んでみたり。

とにかく彼女は、本当にしっかりした信頼できる人です。いつまでも、まじめな話もできる友達でいてほしいと思います。」(A)

N.女)

1・2の文章は、お互いで紹介しあったものであるが、品があり相手の特長を的確にとらえた文章となっていた。このクラスでの作品の中では、高い位置にあるものといえる。「他者紹介文」を教師が読みあげて、それを生徒が聞く。読み終えると、生徒の間で、ホッとした息が出たり、「すごい」「うまいなあ」という声がかかわれる。

これとは反対に、読みあげているそのときから、からかいや笑いが起こる「他者紹介文」もあった。次のような文章である。

3「1―3で、最も目立つ人」と言えば数人は候補が上がるかも知れぬが、最も目立とうとする人」と言うと、もう彼しかない。そう、彼である。

彼は昭和38年10月11日に生まれた。0歳であった。そして、何年か後、附属幼稚園の当たりくじを引いてから、12年、一步一步確実にエリートコース(?)を歩んできた。馬鹿にされても、無視されても、決してそんなことには気が付かずに生きてきたのである。そして、現在に至っている。現在、彼は勉学に励み、スポーツでは、アイススケート、ローラースケート、ジョギング、趣味に至っては、ステレオ、麻雀と、その多才ぶりを思う存分發揮している。

ところで、今まで私たちは彼の外面しか知らなかった。彼と云えば、行動的、というイメージしかわいてこなかった。そこで、彼の内面について触れてみよう。彼は、いつもそわそわしているように見える。そして、何も考えずにすぐ行動に移ってしまうような所があると思われる。ところが、実はこれが大違いなのだ。いつも

そわそわしているように見えるのは、頭の中で、クラスメートの健康状態を気使う心と、石油危機に対する将来への構想とがIQいくらの脳ミソで暴れまわっているからだ。行動をするときだって、ちゃんと考えを持っているのだ。例をあげてみよう。最近、彼はよくS君とプロレスごっこをしている。なぜあんなにくだらないことをするのだろうか。答えはこうである。

「最近、休けい時間しらげるなあ。こんなことではクラスの雰囲気気が悪くなってしまう。よし、ほくが何とかしよう。クラスの雰囲気気を盛りあげよう。」

何とやさしい心。何と美しい友情。私たちは、彼のことを今までどう思ってきただろうか。ああ、何と罪なことをしてしまったのだろう。私たちはもっと彼を見習う必要があるのではないか。彼は、1―3のクラスの鏡である。

彼の紹介を終わる。(T・K男)

この文章には誇張があり、真実でない要素も入ってきている。内面、についてふれようとしているが、一人よがりの空想をもとにして書いている。読みあげつつも、同じ人物を紹介したもう一篇の文章があったことに気づき、以上のことを指摘した後、内面の描き方に注意を促し、その文章を読んだ。次の文章がそれである。

4「俗に「目立ち」と人にいわれる、その典型が彼なのです。いっしょに歩いていけば、いやでも人の目をひいてしまう、それが彼の長所であり、短所であると思います。例えば、消防士が着るような服を学校に着てきてみたり、道路の上で大声をあげてはしゃぎまわ

ったり。

しかしそれはあくまで彼の外面であり、彼の内面はそれほど単純ではありません。彼はとても楽天的ではたから見ても、彼は悲しむというようなことを知っているのかと思うことがあります。しかしあるいは悲しみをはしやぎまわることでもまぎらわしているのではないかとも思われます。彼のそういう面はみならうべきだと僕は思います。」(H・N男)

同じように、内面、にふれていても、4の文章にあらわれているひかえめな推量(それは実感を伴ったものであるが)の表現によるほうが、紹介された人の立場にたっばあい、気持がよい。人を笑いの対象としたような3の書き表しかたは、ほんとうの表現のたのしさとはならない。そのようなことを述べた。

しかし、どこか心にひっかかるものがある、そしてそれがいたい何なのかがわからず、心は晴れやかにならなかった。

「紹介文」というものに対する安易な考えがここに見いだされた。

紹介する人、紹介される人とが互によく知りあっていることが、この種の文のばあい、前提となっている。一年間同じクラスにいるから、よく知っているとは必ずしも限らないのである。そのことを考えていなかったことに思いあたる。

また、1~4の文章(作品)をはじめとする生徒の作文は、誰に向けられて書かれたものかということに対して、考えてみると、やはり教師だけが読むという意識で書かれていると考えられる。そのような読み手想定が高校生のうちになされているのではないか。

これは「紹介文」に限らず、「作文」全般についていえることか

もしれない。

そこには、「紹介文」という文章において顕著にあらわれる人間関係ということが、いっそう潜在化している。誰が、誰に向けて、何を書くかという文章表現の基底に厳として横たわっている人間関係ということに、わたくしは「紹介文」を介して注目させられたのである。

3・4の文章の、内面、の描写ということから考えていくと、書き手と紹介される人物との間にあるかわりかたの違いに気づかされる。

二

「作文」指導における人間関係ということに問題意識を持った経緯は、以上のようなであるが、それはどのようにあらわれてくるのか。生徒の書いた「自己紹介文」をもとに考えてみることにする。

それらはどのようなことがらを中心にして書いてあるかというところ、およそ次に示す九つになる。

- 一 趣味・特技・好きなこと
- 二 服装
- 三 癖
- 四 特徴
- 五 性格
- 六 他の人の自分に対する評
- 七 自分の表面と内面との違い
- 八 自分の内面

九 現在の悩み・問題

これらがさまざまに混ざって、「自己」を紹介していた。それらの「自己紹介文」のうち、「人間関係」ということに改めて考えさせられたのは、次のような文章であった。

5 「去年の夏に初めて、孤独、というものを知って今では毎晩10時から3時頃まで楽しんでる。夜釣りに一人で何日も行って夜が明けらるまでラジオを聞いたり寝ころんで星をみたり今までに見つけられないものを見つけた。それが忘れられなくて毎晩電気を消してラジオを聞いたりしている。その時になって頭に浮かんでくるものはたくさんある。どれも断片的なもので一つのまとまりを持ってはいないが、人には見せた事のないものがあると思う。

例えば僕が知らぬ間に母が年老いている事で数年前母の髪の毛の黒さがすべて染められているものである事がわかった時の事、そして今の母。白い髪に包まれた母を見ると涙が出るかも知れない。それに對して父は、やさしい面を人一倍持っている分だけきびしい。金銭的援助には誰にも負けないとは思っているが、心のやさしさが昔から少なかった。小学校の頃は特にひどかった。なぐられて顔の形が変わり、学校から家に電話もあった。だから今でも、家に帰るとおとなしくしているし、父の前ではめったにはしゃがないようにしている。だからそれだけ学校ではしゃぐのかも知れない。自分でもわからない。

僕はよく街に出る。その時は人と知りあっても話しもしないし全く無口だ。級友なんかに会うとうれしくもなるが、たいていはさげで通る。

僕は、詩を好む。これは決して詩とは呼べないかも知れないけど、特に、ニューミュージックの歌詩や、フォークソングのもの。そして、フレンズ、みたいな読みもの。僕は、これらからいろんな事を学んだ。

僕はスポーツが好きだ。3〜4歳の頃まで僕は半分以上を病院のベットの上で生活し今でも断片的にその記憶は残っている。医者には、「くるとの病になる」(自分は今でもこの病気の实体をすっかりつかんでいない)といわれたらしい。母は医者に見切りをつけて宗教へ走った。そして、それから栗の生活を断ち切り小学校の頃40Cの高熱の時も栗なんか飲まなかった。から当然運動神経も鈍く、小学校の時でも前回りなどができなかったのは僕ぐらいだったと思う。だから、母さんは勉強よりも運動する事をすすめてくれたし、僕も小学校2年の時、道場へ通い始めた。それから週3回、雨の日も雪の日も重たい防具をかかえて往復15kmを歩いた。小学校四年で道場内で2位へ決勝で6年生に3本目をとられた)、新聞にも載ったし5年生の時は今全国大会まで行けた。しかし、中学になって人より体力は劣っていた。中3になって、と力を入れ、鉄アレーやパワーリフトを買ったりいろんな努力をした。そして、今では人なみになったと思っている。

言いたい事はもっとあるがもう余白がない。
――僕の内面の一部を書いた。(K・K男)

この文章の書き手は、さきほどの3・4の文章で「紹介」されている生徒である。わたくしはこれを読んだとき、胸をさされるように、このK君についてそれまで知ろうとしなかったこと、知ってい

でもそれは表面的なことにすぎなかつたことを猛反省させられた。

すなわち、教師である「わたくし」と生徒・書き手である「K君」との間には、教師・生徒という関係は成立していても、「生」というものを仲だちとして結ばれた関係は成立していない。まこと、でもいような信頼関係がなかつたことに気づいたのである。

しかしながら、この文章をK君がわたくし宛に書いたということは、心のいくらかをわたくしに開いてくれたことではないのか。さすれば、わたくしとK君、すなわち教師・生徒という関係は、信頼関係へ入るうとしていたのではないか。事実、それ以後はそれまでにくらべて、わたくしはK君に話しかけるのを楽しく感じるようになった。

ここに「作文」指導における新たな関係があらわれるのである。さらに、それはまた、他の生徒の人間に対する意識をも変える。

後日、生徒に書いてもらった授業の感想文の中に、「K君の作文が読まれたが、それからは、みんななんとなく、K君に対する態度が変わってきたように思えた」とあったが、そのように新たな関係が「作文」は形成していく。個人の考えかたをも変えていく。

三

それにつけても思い出されるのは、かつて古田弘氏が「教室論」(『岩波講座国語教育』昭和十二年九月一〇日岩波書店刊)において紹介されている次のような話である。

「これは、ある女学校の教師から聞いた話。私は長い教師生活で誇るべき事は一つもないが、たつた一つ嬉しい事がある。それは、す

で十年前も前の事であるが、受持の子で、裕福に育つた生徒の家が破産に瀕した。その子は可成り勝気な子で日誌によくその悩みを書いて居た。そのたびたび、いろ／＼と説いてやりその時は納得して居る様であるが、又次に出す日誌には再び、同じ悩みを訴へて居ると、ある日の国語の時間二茶の「みどり日記」であつた。そこで、一茶の生涯をかたり、「故郷は寄るもさほるも茨の花」のひがみ、争闘が、後には、「落葉かくすべをも知らず年暮れぬ」「たくほどは風がくれたる落葉かな」「何事もあなたまかせの年の暮——晩婚に出来た愛児に死なれ、妻に死なれ、中風になり、火事にあひ、しかも、「美しや障子の穴の天の河」といふ、語るうちに私自身も引込まれて一心にかたり、「天の河」に至ると、教室のどこかで身ふるひした様なけはひである。その子なのである。それで昼食後、その子に出会つたから、今日は何か感じた事があるだらうといふと、につこりしてハイといふ。一茶だね。ハイ。それで私も安心した。するとその子は又につこりして頭を下げて去る。その後、その子をしばらくここへ残して一家転住する事になつた時、母親がわざわざ私の所へ来て、あの子の事をたのむ。あの子は、一茶の時間にかふかい感動を受けたのを「先生はちゃんと御覧下さつて居た」と歸つて泣きました。親も及ばぬ事で、ぜひ、一度お目にかかつてお礼を申し、お頼みもしておきたいと。それから十年女の子は嫁げば、多く文通は途絶えるものですが、今でもたびたび便りをよこしてくれるのでと。」(前掲書 五九―六〇頁)

この事例にわたくしは、教師・生徒の信頼関係の成立過程を見

る。ほんとうの通じ合いがここにあるように思うのである。

一茶の俳句とその生涯を仲立ちとして、通じ合う、まこと、がある。

高校の国語教室づくりのために、まずこのことに注目する必要があると考えられる。

思うに、国語教室における教師[↑]⇄[↓]生徒の信頼関係、通じ合いとい

うものが、授業を成り立たせる大切な契機の一つではなからうか。

なかでも「作文」において、教室に対しての信頼感・安心感というものが、生徒の、表現、を滑らかに、明るいものにするのではなからうか。

（作文記述中、机間巡視をすると、生徒は人に見られないように用紙を覆ったりして見せたがらないのも、このことに由来するののか。）

それはまた、表現意欲、と結びつくのだいじな問題と考えられる。

さきほどのK君の文章のおしまいのところには、「言いたい事もっとあるが」ということばが記されている。高校生はその胸のうち、表現への意欲、を燃えるほど秘めているのである。そのためにも、国語教室にいま以上に、通じ合いということを徹底させる必要があると考えられる。

おわりに

以上、実際に行った「作文」の授業を通じて考えさせられた、国語教室づくりのための問題点を指摘した。ささやかな、まことに心細い実践であり、ここに報告したこともすでに述べられていると思

われるが、身をもってそのように感じ、思い、考えさせられた者として、今後とも国語科授業への思いをいっそう強く持ちつつ書いていきたいと念ずるしだいである。

単元「作文」から得たこの一端を報告し、今後の課題としたい。

（本学附属中・高等学校教諭）